

井原塚廻遺跡の再検討

—弥生時代中期後半～後期の墳墓群の新資料から—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

Ⅰ. はじめに

井原塚廻遺跡は、弥生～古墳時代の集落遺跡である。昭和63（1988）年に井原地区県営圃場整備に伴う発掘調査が行われ、平成4（1992）年に調査報告書（以下『報告書』（註1））が刊行された。

筆者はこの成果のうち弥生時代中期後半の甕棺墓に着目し、周囲に周溝をめぐるせた方形の区画墓であることを指摘した（註2）。

平成23年度には、井原塚廻遺跡の関連資料が博物館に移管されたことを受け、収蔵目録作成のために資料の再整理を行ったところ、弥生時代の墳墓や祭祀土壇出土遺物に報告漏れの資料が存在することが判明した。

また、甕棺は博物館の開館当初は常設展示していたが、平成17（2005）年の福岡西方沖地震で倒壊したため、再度の展示をめざして復原作業にとりかかったところ、その途中で棺の内面に赤色顔料の塗布が確認された。

これらの成果は、弥生時代中期後半における伊都国成立前後の当該地方の墓制を考える上で有益な事例になると思われるので、改めて報告することとした。

なお、甕棺に塗布された赤色顔料については、志賀智史氏（九州国立博物館）に同定をお願いし、実体顕微鏡観察、生物顕微鏡観察、蛍光X線分析等のお手を煩わせるとともに、貴重なご助言をいただいた。記して感謝いたします。

Ⅱ. 遺跡の立地と歴史的環境

井原塚廻遺跡は川原川とその支流の赤崎川に挟まれた縦に長い三角形形状を呈する段丘上に立地する（第1図①）。伊都国の拠点集落と考える三雲・井原遺跡の南東1kmに位置し、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて、王都の周辺に形成された衛星集落の一つと考えられる。

段丘上では、これまでに縄文時代～古墳時代の集落関連遺構が発見され、発掘調査も行われている。怡土小学校内に立地する高祖金口遺跡（第1

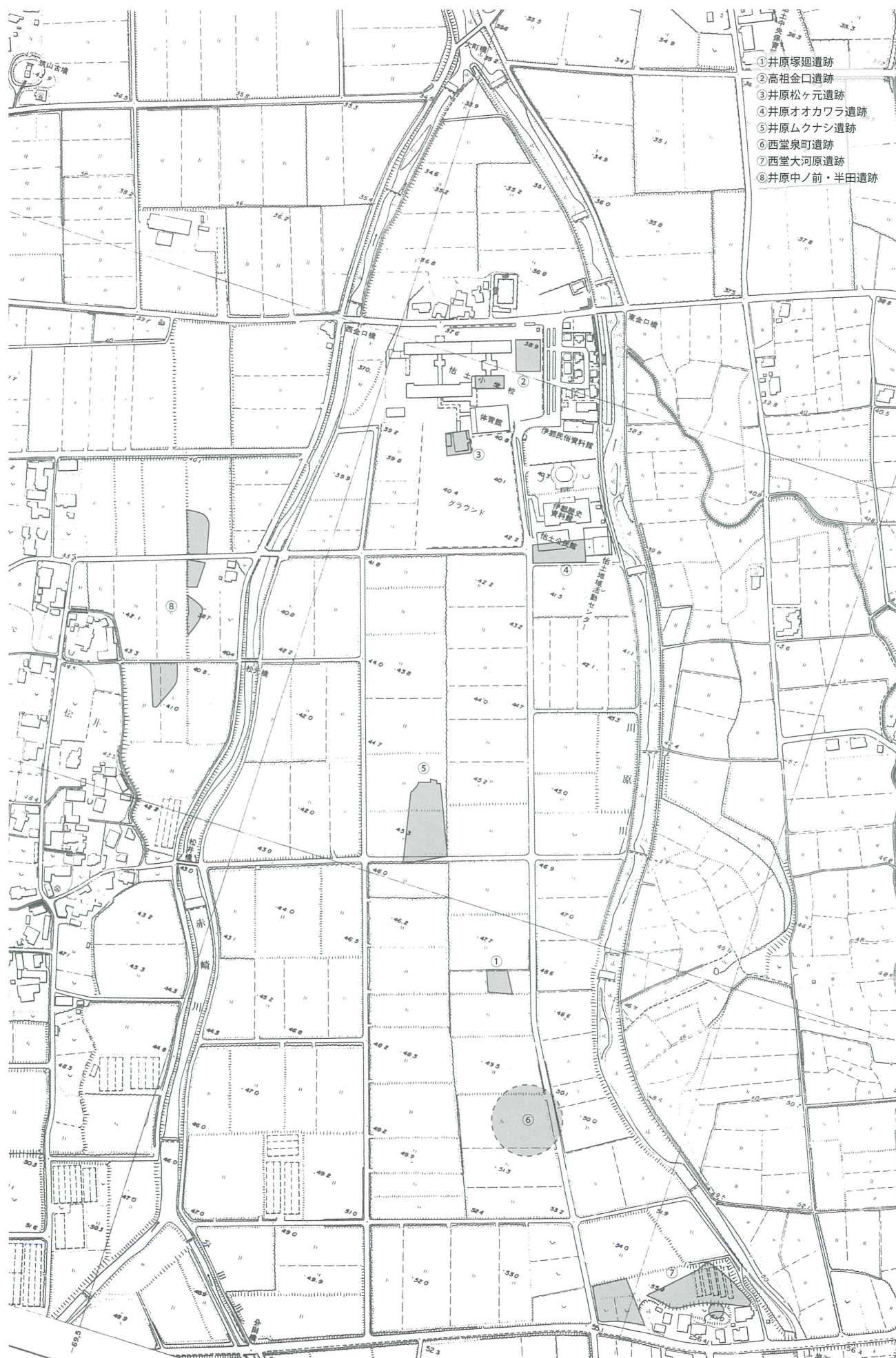
図②）では、段丘の斜面に堆積した洪水に伴う堆積砂層中から縄文後期～弥生早期の土器や石器等がまとまって出土した。ごく近隣に当該期の集落が展開したものと推定される。（註3）

弥生時代の遺構としては、井原ムクナシ遺跡（第1図⑤）で中期の大溝が検出されたことが報告されている。残念ながら遺構の掘り下げは行われていないが、近隣の西堂大河原遺跡（第1図⑦）では弥生中期の甕棺墓、弥生中期の土器や石器が出土しており（註4）、これらから総合的に判断すれば、この一帯に弥生時代中期の集落が展開した可能性が高い。

なお、前原町文化財地図（註5）には井原塚廻遺跡の南に近接する西堂（泉町遺跡・第1図⑥）で弥生後期の細形銅剣が出土したと記録されているが、詳細は不明である。

一方、川原川東岸の末永地区の段丘上でも、弥生時代中期後半～後期の集落の存在が確認されており、小型仿製鏡も出土している（註6）が、本格的な調査は行われていないため、遺跡の詳細については今後の調査に委ねられる。

古墳時代では、井原ムクナシ遺跡で前期中葉の竪穴住居群が、井原塚廻遺跡で前期後半～中期の竪穴住居群が確認された。同じく前期の竪穴住居群は、赤崎川を挟んで西岸の井原中ノ前・半田遺跡（第1図⑧）でも発見されており（未報告）、赤崎川を挟んで段丘斜面一帯に古墳時代前期～中期の集落が展開していたことがわかる。さらに上流の西堂大河原遺跡（註6）や西堂四反田遺跡（註7）では古墳時代後期の竪穴住居が調査されていることから、古墳時代になると当該地域の集落は、三雲・井原遺跡から標高の高い南側の井原・西堂地区に徐々に移動した様子がうかがえる。また、この地区の古墳時代前期の竪穴住居からは多数の三韓式土器が出土しており（註8）、集落の性格、さらに当該期の糸島地方における朝鮮半島との交流の実態を知る上でも注意が必要である。



第1図 井原塚廻遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (平成元(1989)年調査図 1/5,000)

Ⅲ. 調査の内容

1. 墳墓

『報告書』では、弥生時代墳墓として中期の成人甕棺墓1基、その近隣に営まれた弥生中期末～後期前葉の小児甕棺墓3基、土壙墓2基が報告されている。しかし、遺構配置図をみるとこの墓群の南北延長上に土壙が列をなして検出されており、また、2号住居跡の南壁周辺、4号甕棺墓の北側などでも長方形プランの掘り方をもつ土壙が群をなして検出されている(第2図)。

『報告書』では、これらの遺構はいずれも掘り方が浅いことを理由に、墳墓ではないと考えられたが、近年、井原ヤリミゾ遺跡で土壙墓や木棺墓、石棺墓などの成人墓と小児用甕棺墓が群をなして

墓群を構成する事例が多く確認されていることから、これらも土壙墓であった可能性を想定すべきと考える(註9)。

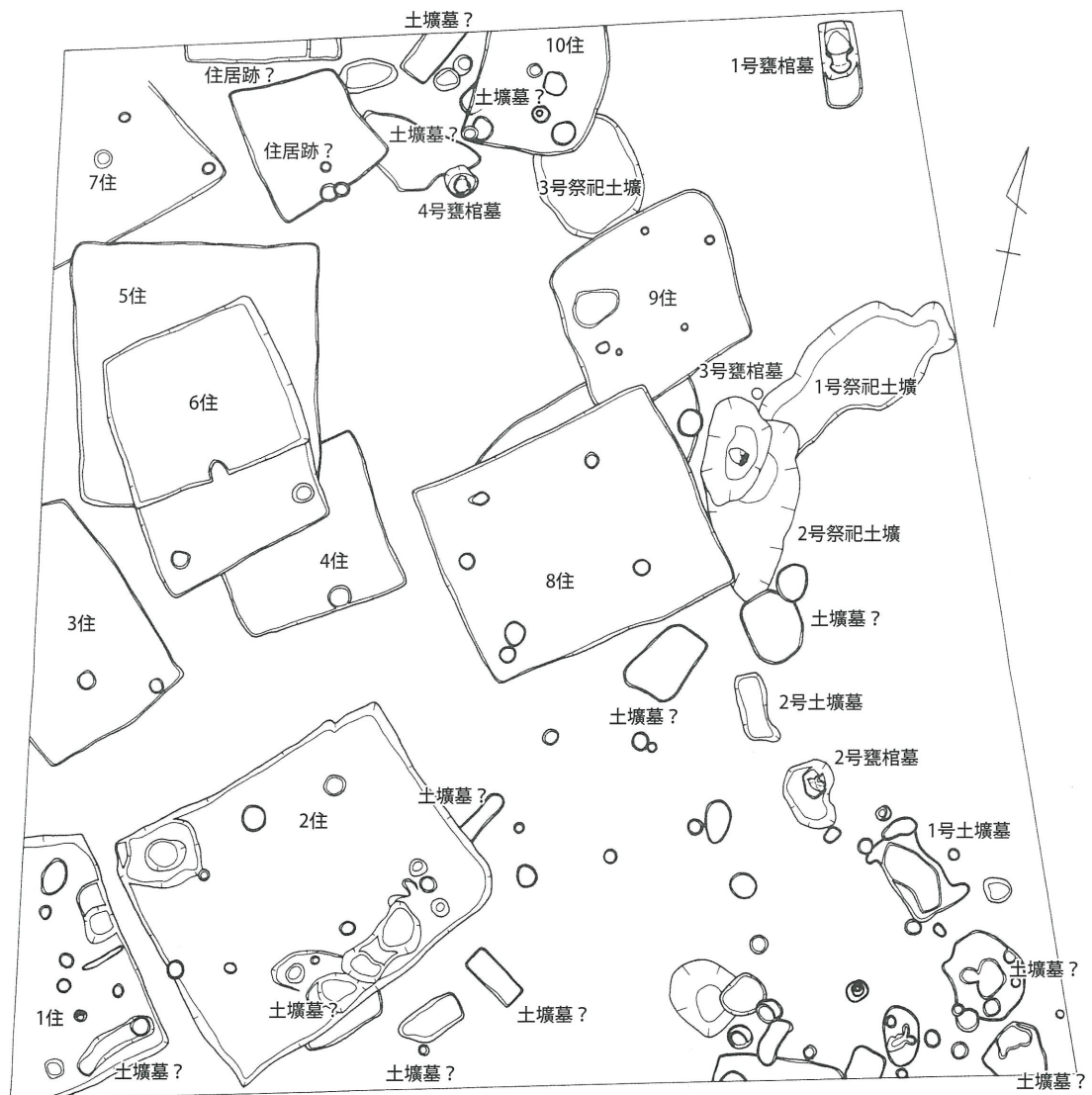
(1) 甕棺墓

1号甕棺墓(巻頭図版2-a,b、第3図)

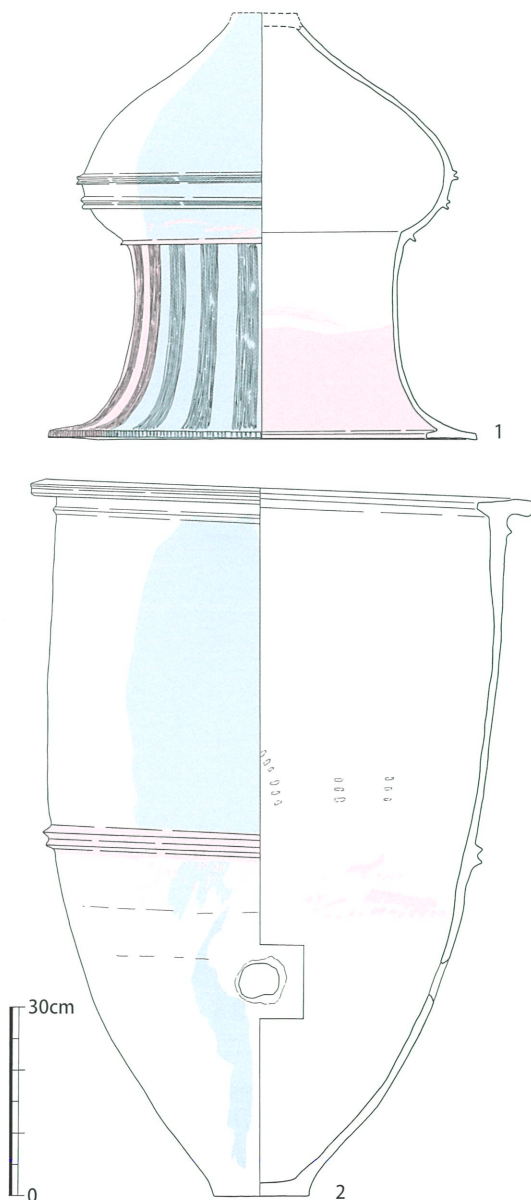
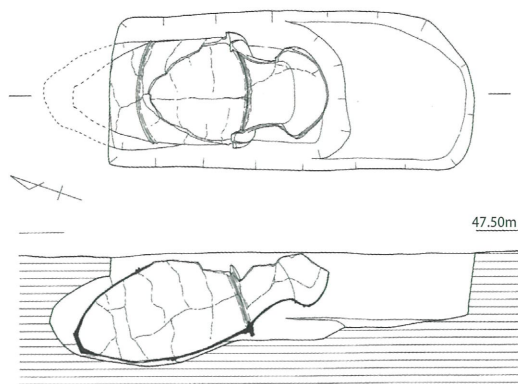
遺構

1号甕棺墓は、調査地点で唯一の成人甕棺墓で、上棺に大型広口壺を用いた接口式の成人用甕棺である。

墓壙の平面プランは細長い隅丸長方形で、甕棺は水平面から19度の勾配をつけて埋置され、下棺の下半部は奥行40cmの横壙を掘ってそれに差し込むように納めていた。甕棺の上面が削平に



第2図 井原塚廻遺跡の遺構配置図(1/200)



第3図 1号甕棺墓実測図(1/50)及び甕棺実測図(1/12)『井原塚廻遺跡』第4図に加筆して転載
※赤色は丹塗り部、青色は黒塗り部。以下の土器実測図の色刷りも同様の凡例である。

よって損壊していることから、遺構面が大きく削平を受けていたことは明らかである。

なお、『報告書』では1号甕棺墓と1、3号祭祀土壇間のスペースに遺構の表示はみられないが、当時の発掘現場の垂直写真(巻頭図版2-a)を見ると、4基の円形、長方形に掘り下げた遺構の掘り方が認められた。特に、後者は2基の長方形土壇が切り合っているように見えるが、これに関する記録が全く残っておらず、詳細は不明である。

甕棺(巻頭図版3、第3図)

上棺は、鋤先口縁の大型広口壺で、頸部と胴部の境に1条、胴中央部に2条のM字突帯がめぐる。口頸部が肥大化し口縁径は胴部最大径を上回る。

赤色顔料が口頸部の外面全体と内面の頸部上半部にかけて幅2cmほどの刷毛状の工具を用いて塗布され、外面では赤色顔料の上からさらに黒色顔料の塗布も施されている。

下棺は、胴部が長胴化し口縁は断面T字型でわずかに内径している。その直下に1条の三角突帯がめぐる。また、胴中央からやや下方にM字突帯がめぐる。

胴下部の突帯下に薄赤色を呈した顔料の飛沫痕が連続して観察された(巻頭図版3-d)。粘土の水溶液にベンガラを混和し突帯に塗布したものと考えられ、その際に飛散して下面に付着した可能性が高い(註10)。赤色顔料の素材はベンガラが用いられており、塗布された時期については、焼成前と推定された(註11)。

外面器表に黒色顔料が塗布されていることは既に報告されているが、詳細に観察すると赤色顔料も所々に残っている。しかし、顔料の剥落が著しいため、本来、どのように塗布されていたかまでは明らかにできていない。

さらに内面でも赤色顔料の塗付が認められた。胴部の突帯から10cmほど下がった裏面で、指頭を押し付けたような楕円形の赤色斑状文が横一列に並んで施されている。指頭状の斑文は胴部を全周せずに、全体の3分の2程度まで廻ったところで止まっていて、施されていない範囲は、胴下部の穿孔が施された箇所のちょうど対面にあたっている。

これら器表面で観察された赤色顔料もベンガラと考えられるが、塗付された時期については焼成前と推定されている(註11)。

なお、甕棺の時期は、三雲・井原の甕棺編年のIV-B期（註12）に位置づけられる。

2号甕棺墓（第4図①）

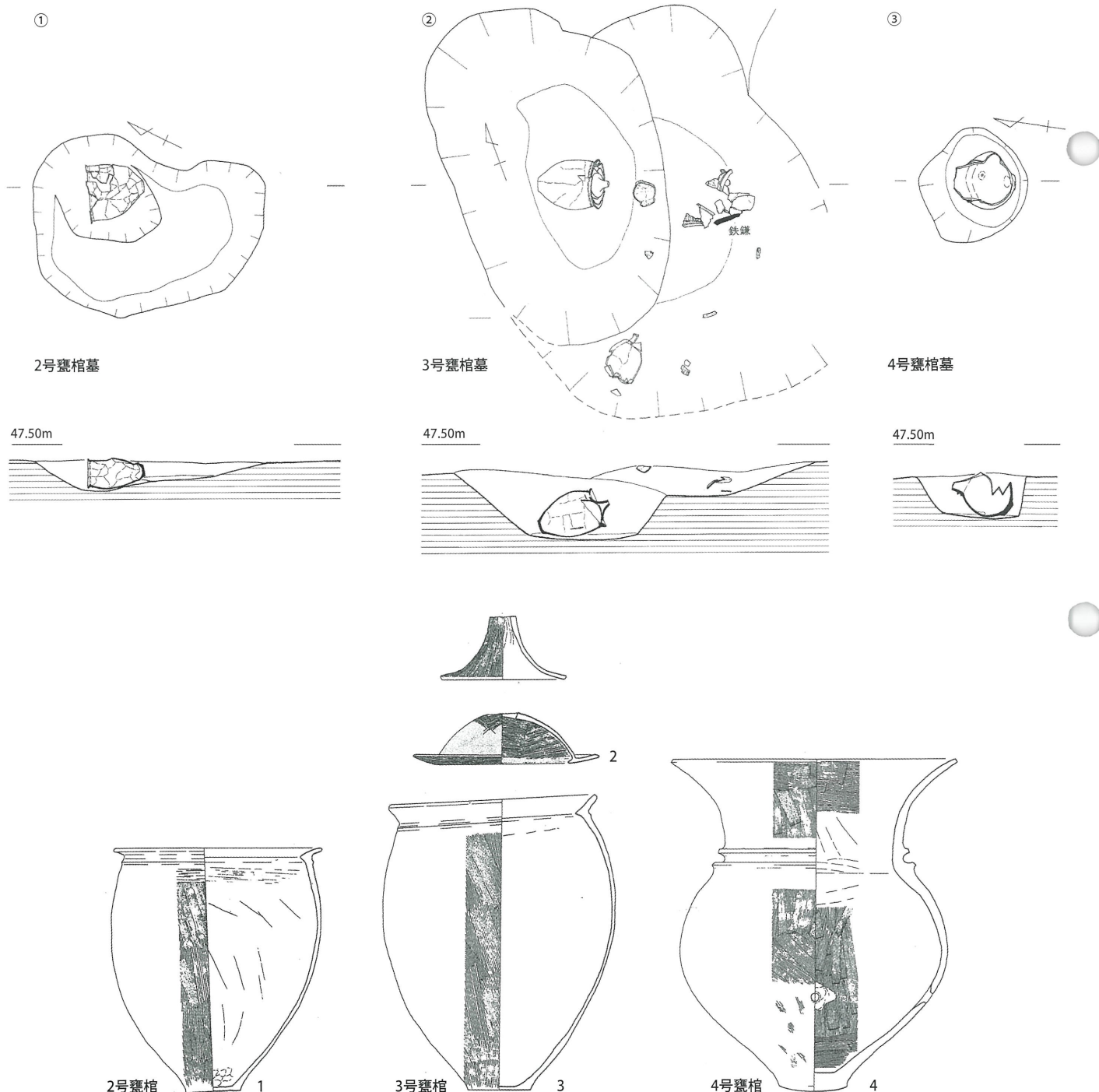
1号土壌墓と2号土壌墓の間で検出した単棺の小児用甕棺墓で、不正形の1次墓壙の北東端に浅い2次墓壙を掘って納める。

土器 胴上端部がわずかに内傾し、逆L字の口縁端部は少し上向きとなって「く」の字状に外反す

る兆候がみられる。底径は器高に比べるとやや大きめである。三雲・井原遺跡の甕棺編年では、IV-B期に位置づけられる。

3号甕棺墓（第4図②）

1号溝を切って営まれた小児用甕棺墓で、高さ57.7cmの甕を下棺、高さ27.3cmの丹塗磨研高坏を蓋として使用していた。『報告書』では、2号祭祀土壌をこの甕棺墓の祭祀土壌と位置づけてい



第4図 2～4号甕棺墓実測図（1/50）および甕棺実測図（1/10）『井原塚廻遺跡』第5～9図から転載

るが、遺構は相互に切り合い関係にある。甕棺と、祭祀土壇から出土した甕を比較すると、甕棺の口縁は、「く」の字に屈曲反転しており、逆L字形を呈する祭祀土壇の甕よりも新しいことからこの甕棺墓が2号祭祀土壇よりも後出する関係にあると考えられる。

土器 甕の胴上部が内傾し、口縁部は「く」の字に反転して内湾ぎみに立ち上がるもので、外面はハケ仕上げで終えている。

高坏（巻頭図版4-a）は、坏部が深めで半球状を呈し、口縁部は長く先端は垂れている。脚部は脚柱が短めで内部には粘土が充填されている。三雲・井原遺跡編年のⅣ-C期に位置づけられる。

4号甕棺墓（第4図③）

口頸部を打ち欠いた広口壺を棺体とした単棺の小児用甕棺である。

土器 壺は底部がレンズ状に丸く膨れており、頸部の締まりは緩く、境界部に断面「コ」の字状の突帯が2条めぐる。内外面ともハケ調整痕が鮮明に残っており、三雲・井原遺跡のⅥ-A期に位置づけられる。

(2) 土壇墓

1号土壇墓（第5図1）

1号甕棺墓の南に並ぶ土壇群の一つで、全長2.52m、幅1.38m、深さ18cmの不正長方形を呈し、『報告書』でも土壇墓とされた。内部が2段掘りになっていることから、木棺墓であったと考えられるが、棺の輪郭は不正形となっていて詳細は明らかでない。

墓壇の北西端近くで、丹塗磨研甕の下半部が倒置状態で出土した。破碎供献されたと考えられ、弥生中期後半の墓であることがわかる。

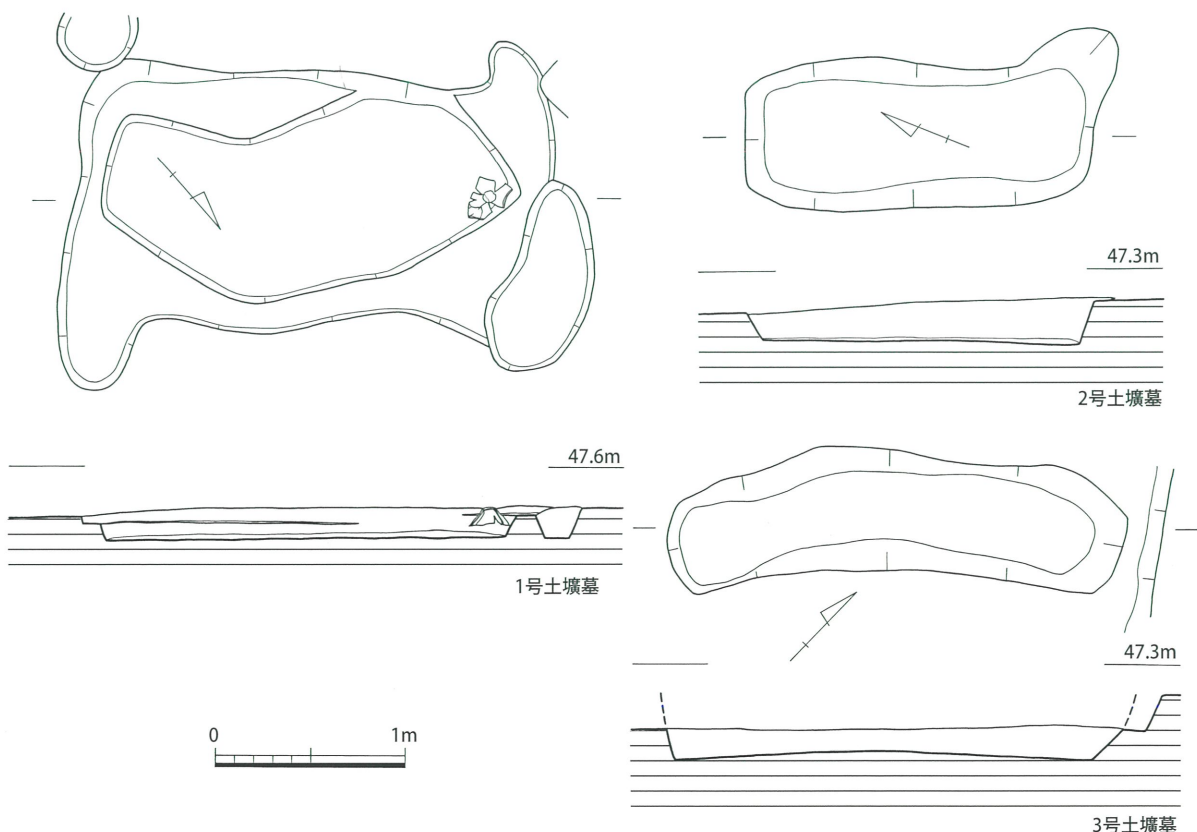
出土土器（第12図3） 丹塗磨研された甕の胴下部である。外面には横方向の丁寧な研磨が施される。破断面に穿孔の痕跡が認められる。

2号土壇墓（第5図2）

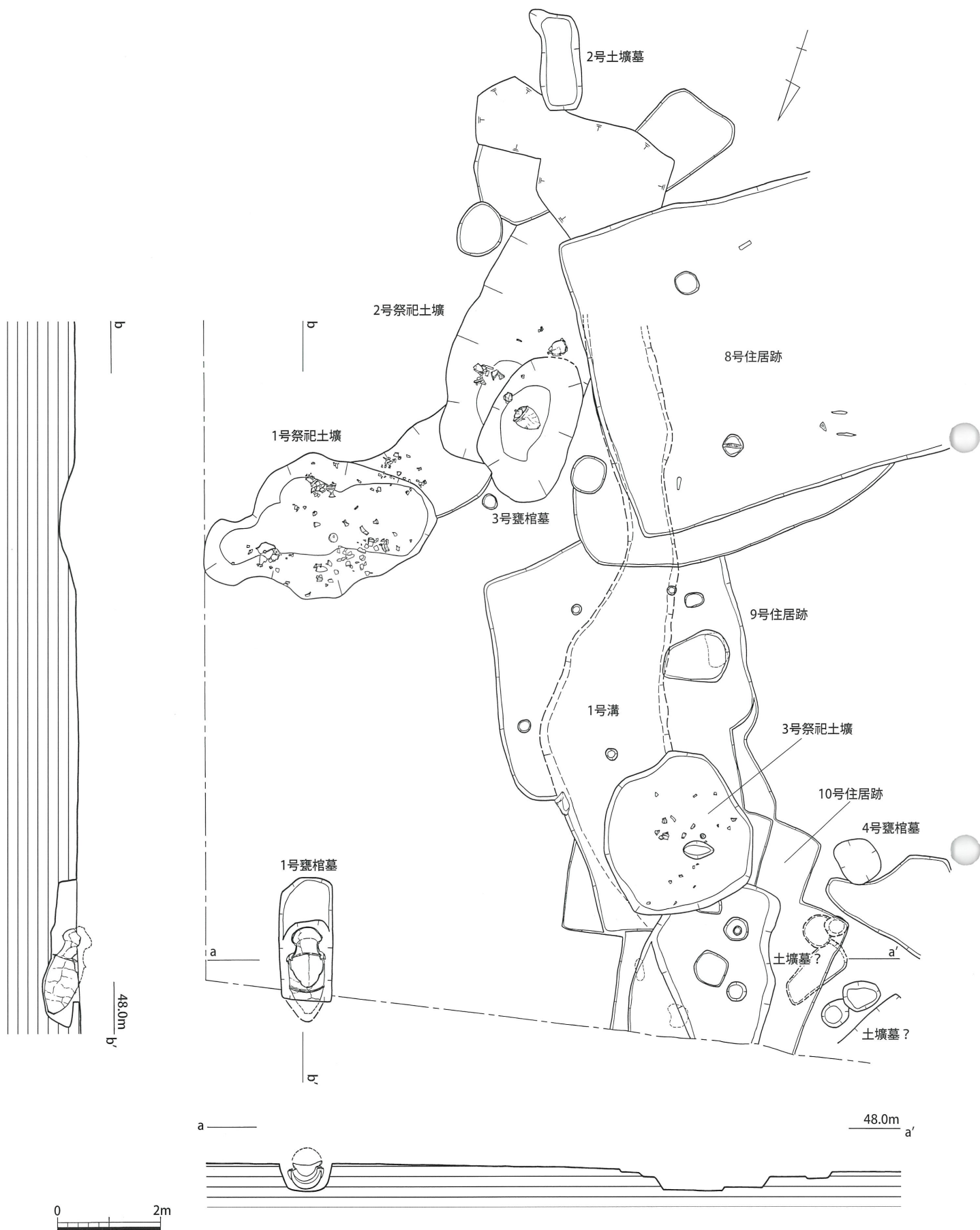
1号墓と同じく南北に並ぶ墳墓群の北端に位置し、全長1.85m、幅82cm、深さ25cmを測る。時期を示す資料は出土していないが、1号土壇墓、2号甕棺墓とはさほど時期を置かずには埋葬されたものと考えられる。

3号土壇墓（第5図3）

1号甕棺の南西部にやや離れた位置で検出され



第5図 土壇墓実測図（1/40）



第6図 1号土墳墓と祭祀土墳群、1号溝との関係 (1/100)

た細長い土壌で1号住居の床面から検出された。長さ2.43m、幅63cm、深さ35cmを測る。『報告書』では取り上げられていないが、2号住居跡の南端近くで検出されている土壌（墓）とともに墓群を形成した土壌墓と考えられる。

（3）祭祀土壌と1号溝

遺構（巻頭図版1-b、第6図）

1号甕棺墓から南に5.2m離れた位置で1号祭祀土壌と2号祭祀土壌が、一部が切り合いながら縦長に並んで検出され、そのさらに北に5.3mほど離れて3号祭祀土壌が検出されている。

1号祭祀土壌は長さ4.5m、幅2.8mの不正長楕円形の土壌で、埋土から袋状口縁壺、有蓋脚付短頸壺、短頸壺などが器表面の保存状態を良好に保ったまま出土している。

2号祭祀土壌は、不正隅丸方形の土壌で、埋土から甕、袋状口縁短頸壺が良好な保存状態を保って出土した。3号甕棺墓と切り合い関係にあり、3号甕棺墓に先行して掘削されたと考えられている。

そこで、改めて各遺構の切り合い関係を確認するため調査時の遺構配置原図を確認したところ、3号祭祀土壌を切って営まれた古墳時代の8号、9号、10号住居跡の下面に、これらに切られて南北方向に伸びる溝（1号溝）が存在していたことがわかった（第6図）。この溝は3号祭祀土壌にも切られていて、これら遺構群の中で最も古いことになる。

さらに、1、2号祭祀土壌から出土した丹塗磨研土器片の一部が相互に接合し、部位は異なるものの1号溝出土土器と同一個体であった可能性を有する土器片も確認できたことから、他の土器片についても再度観察を試みた。

1号溝や祭祀土壌の埋土には古式土師器も出土しているが、これは切り合った住居跡の土器が混入したことに起因すると考えられた。特に10号住居跡では床面が階段状に深く掘り下げられており（第6図a-a'断面）、1号溝も一緒に掘り下げられたとみられる。

1号溝は、実測図では8号住居跡の途中で途切れていたが、現場の垂直写真で確認してみると、溝の埋土である黒色土層はこの住居跡の南端近くまで続いていたことがわかる。さらにここで分枝

し、一方は東に屈曲して1、2号祭祀土壌下まで伸びてさらに東に続く。このことから1～3号祭祀土壌はいずれも1号溝の埋没後に、これを切って掘り込まれたと考えられる。

出土土器（第7～10図）

1～3号祭祀土壌では、新たに破片が接合できたことで、土器の形状がより詳細に把握できたものや、新たに図化できた土器もあり、図化掲載できた土器の総点数は47点となった。

実測図を掲載した土器のなかでも甕2点（28、29）以外は全て丹塗磨研土器で、全体に占める割合は極めて高い。

丹塗磨研土器は、胎土にきめ細かな粘土が用いられ、器壁は薄く丁寧に研磨が施された精製品が多い。

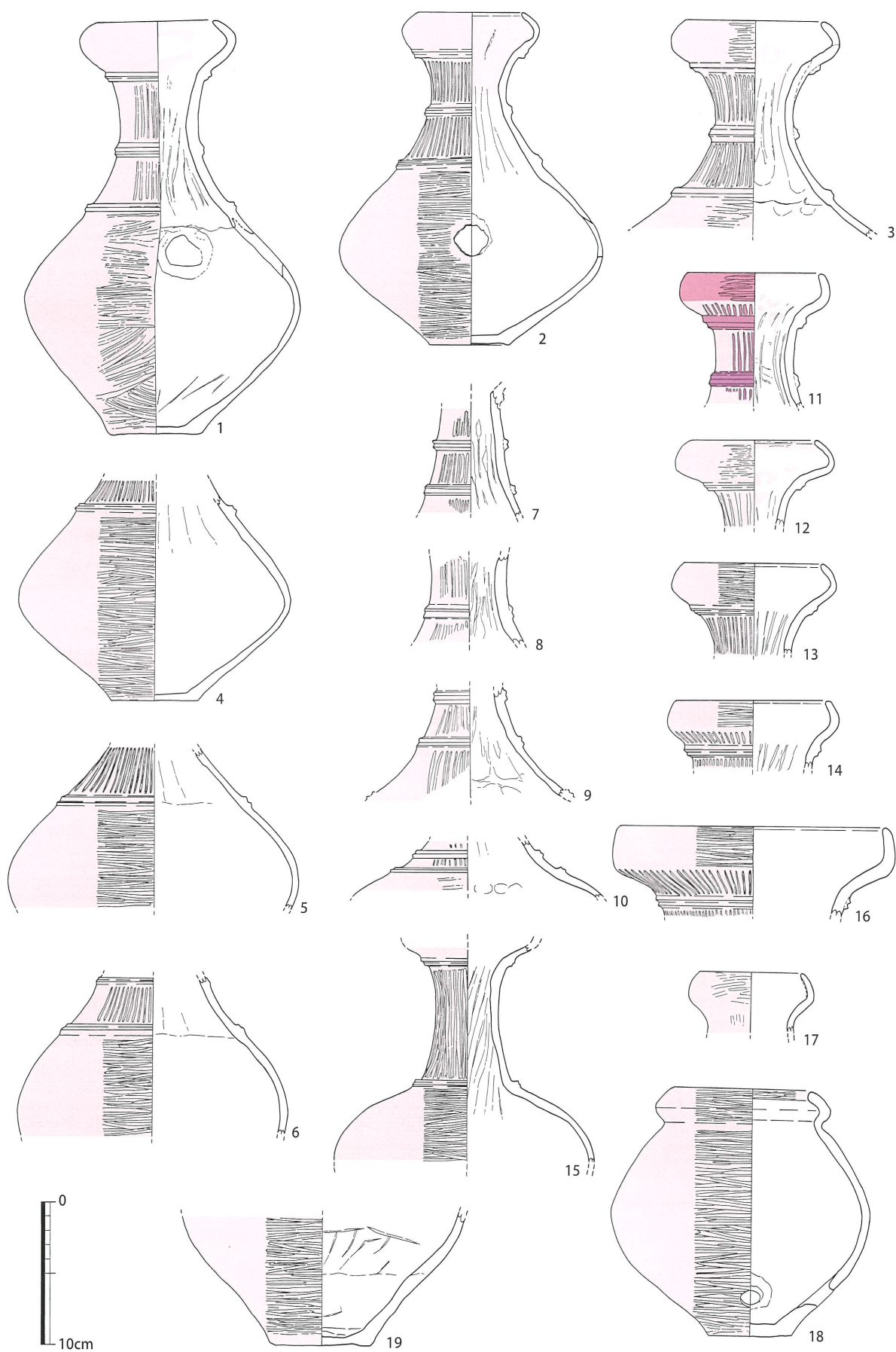
器種構成としては、高坏と袋状口縁壺の多さが目を引く一方、甕、広口壺、鉢の割合は低く、大型器台は出土していない。

壺、甕には打ち欠きや穿孔の痕跡を持つものが多く、また、高坏、袋状口縁壺では、口頸部や坏部に対して脚部や胴部など土器下半部の出土量が少ない傾向が見られる。

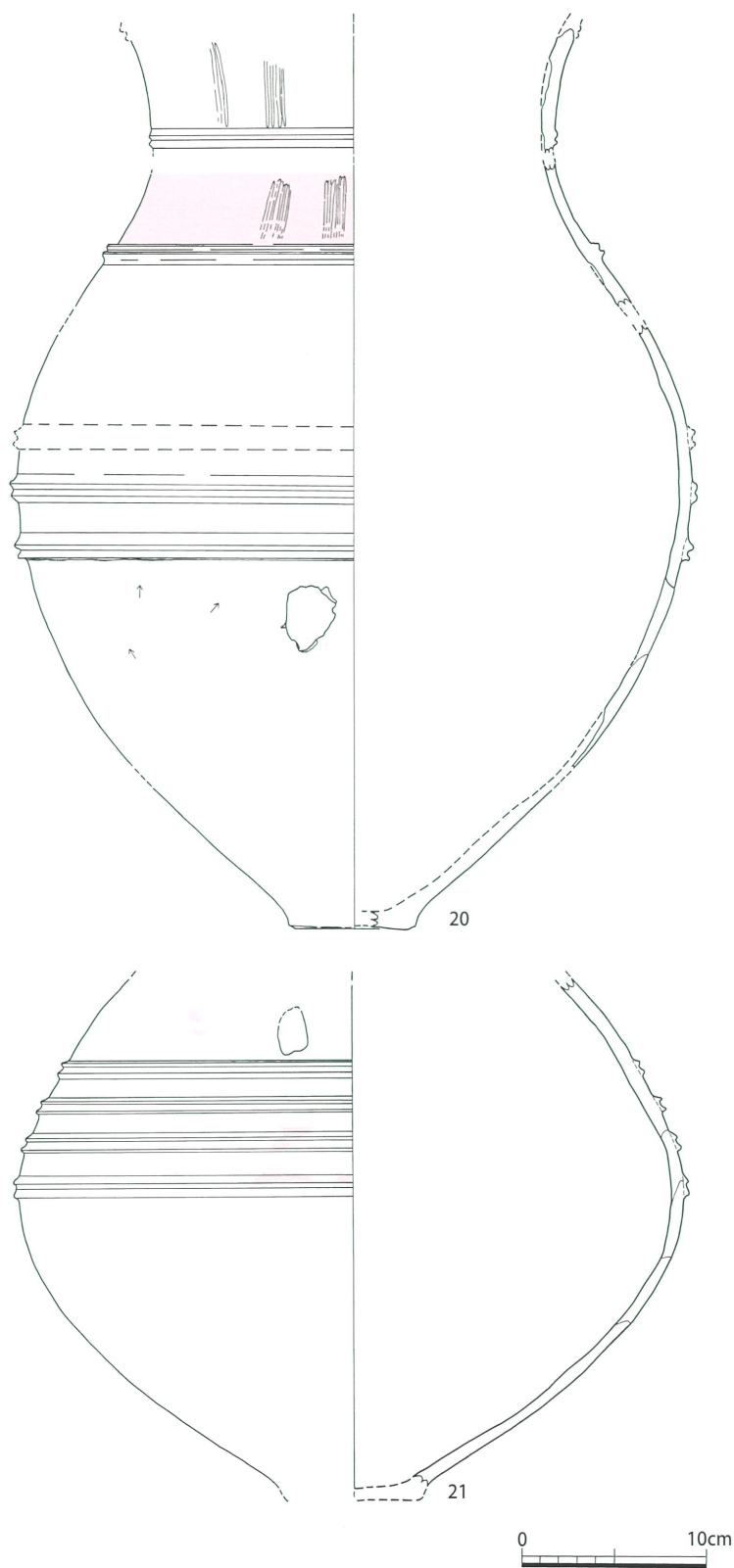
出土した土器は、残存状況の良し悪しが個体によって明瞭で、器表面の残存状態が良好な土器群（A群；1～6、15、18、19、22～27、31～37、41、47）と、残存部位が少なく器表面の劣化が著しく進行した土器群（B群；7～14、16、17、20、21、28、29、38～40、42～46）に分けることができる。A群の多くは、1～3号祭祀土壌の出土品で丹塗り状態が良好な状態を保って出土したものであるのに対し、B群は広範囲に散乱して出土したものが多く、異なる祭祀土壌から出土したものが接合したものもある。

なお、10は2号住居跡の埋土から出土したもので、参考資料として掲載した。

袋状口縁壺（1～19） 胴部は扁球状で、細く括れた頸部から口縁部に向けて大きく反転し膨らんだ後に内傾して収束する。これまで三雲・井原遺跡（番上II-5区土器溜等）で出土したものより口頸部が小ぶりで、胴部から口頸部にかけての絞り込みが著しく顕著で内傾度が大きいのが特徴である。A群の土器は、胴部から頸部にかけて直線的にすぼまる傾向が強く、通常の袋状口縁壺の頸部に見られるようにM字突帯が上、中、下に各



第7图 祭祀土壇、1号溝出土土器① (1/4)



第8図 祭祀土壇、1号溝出土土器② (1/4)

一段の3条に配されている（第7図）。

これに対して、B群は、頸部がA群よりもさらに細く絞り込まれており、胴部から頸部にかけて外反ぎみに成形されていて、曲線的な輪郭を有するのが特徴といえる。また、M字突帯間の間隔が狭く、上下二条ずつの計4条の突帯を配するものが多く、縦方向の研磨間隔も密に施されている。

11では、口頸部に縦方向の研磨の替わりに赤色顔料による塗彩が施されている。

15は、胴部と頸部との境の稜が明瞭で、頸部の上端と下端に各1条のM字突帯が配される。

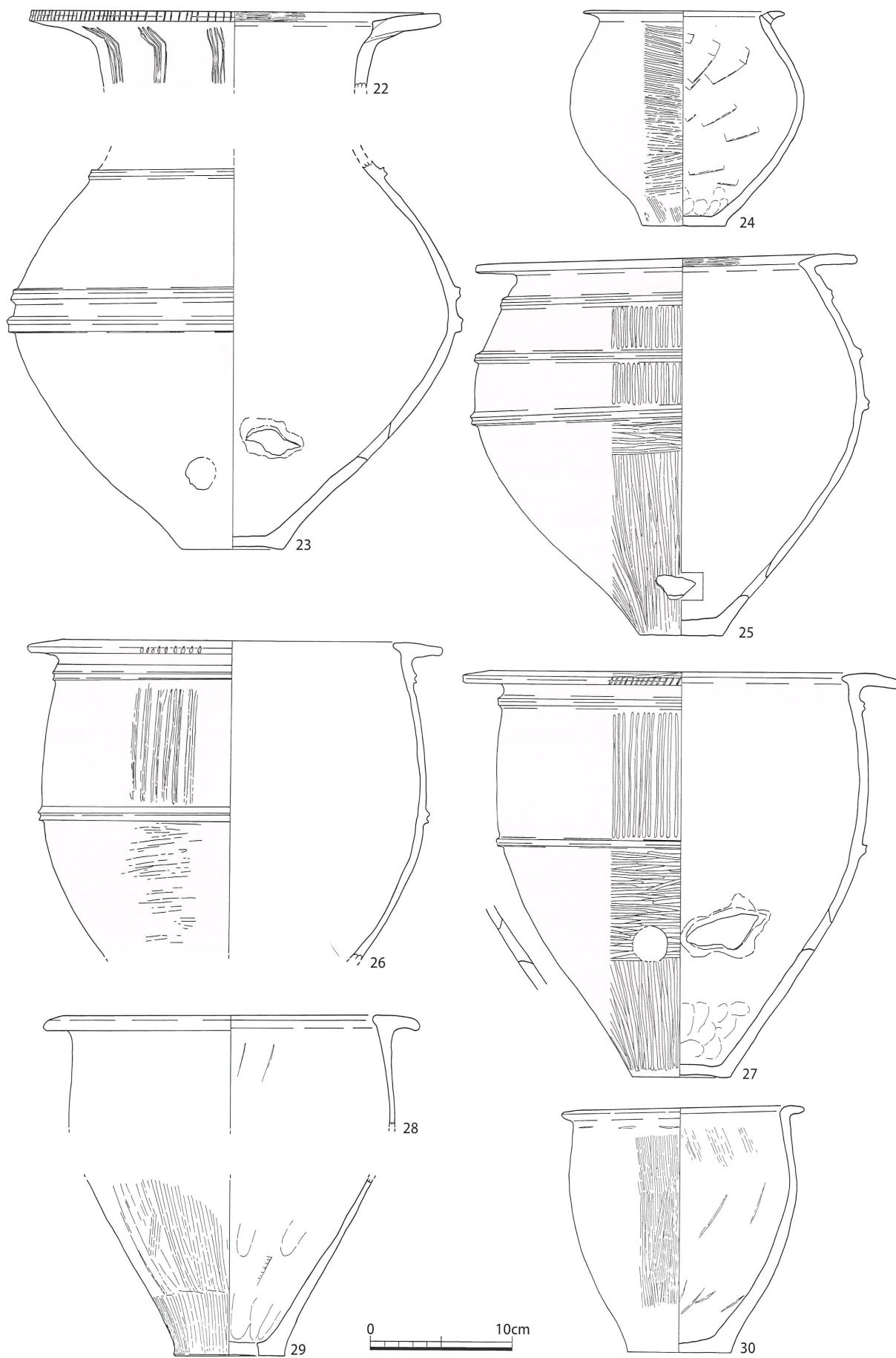
16は、大型の袋状口縁壺の口縁で、口縁の内傾度は甘く、調整も粗い。

17は、ミニチュア的な袋状口縁壺片で、18は、袋状口縁を有する短頸壺である。

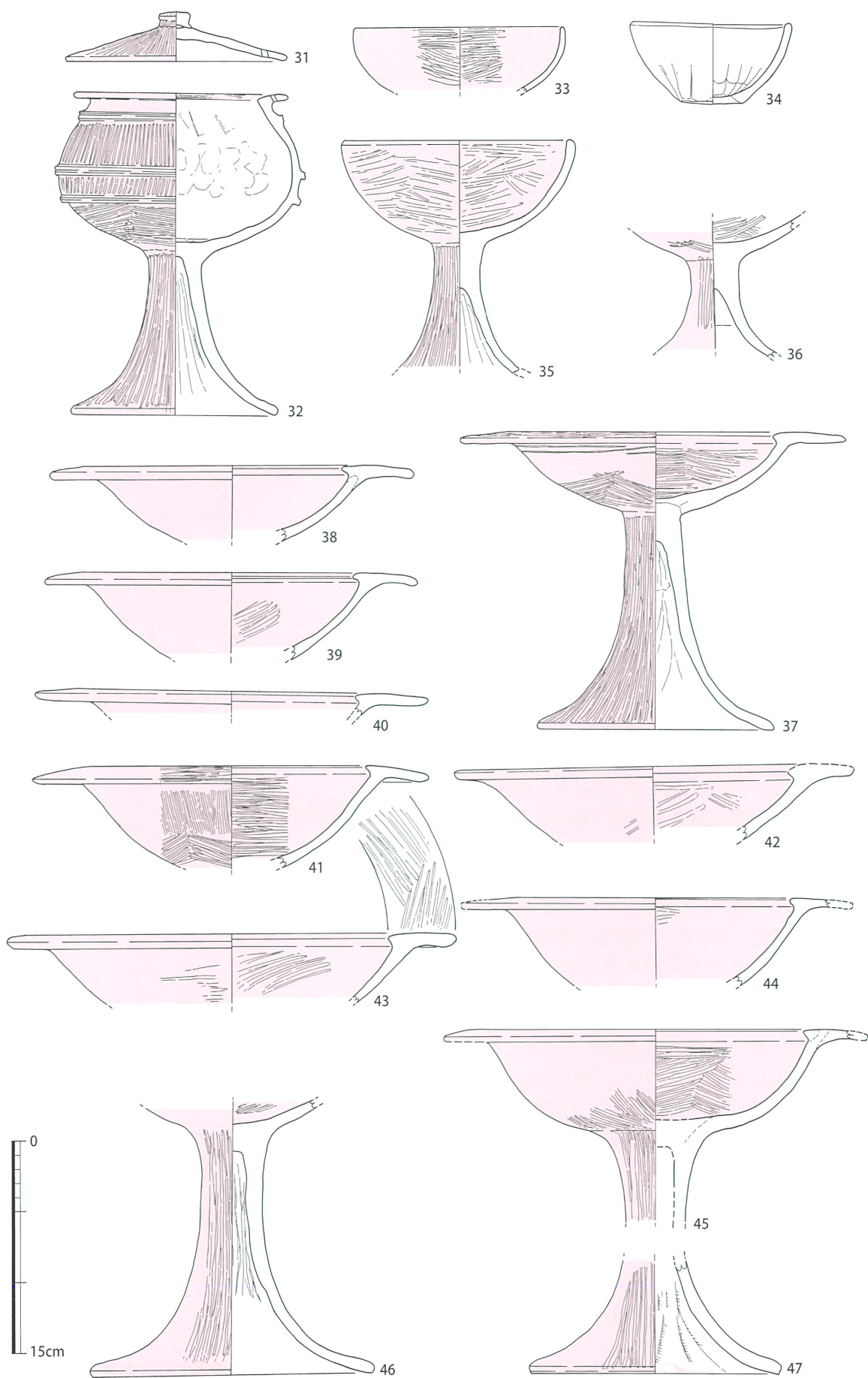
19は、袋状口縁壺の胴下半部と推定したが、器壁が厚く胴部の形状が丸みをもっていると考えられ他の器種である可能性もある。

広口壺 (20～23) 20、21は1号祭祀土壇の西縁近くから集中して出土した、いずれも鋤先口縁を持つ大型の広口壺と考えられ、胴部最大径が60cmほどになる。残存量、部位が少ないため断片から復原的に図化した。『報告書』よりも復原率が向上した。

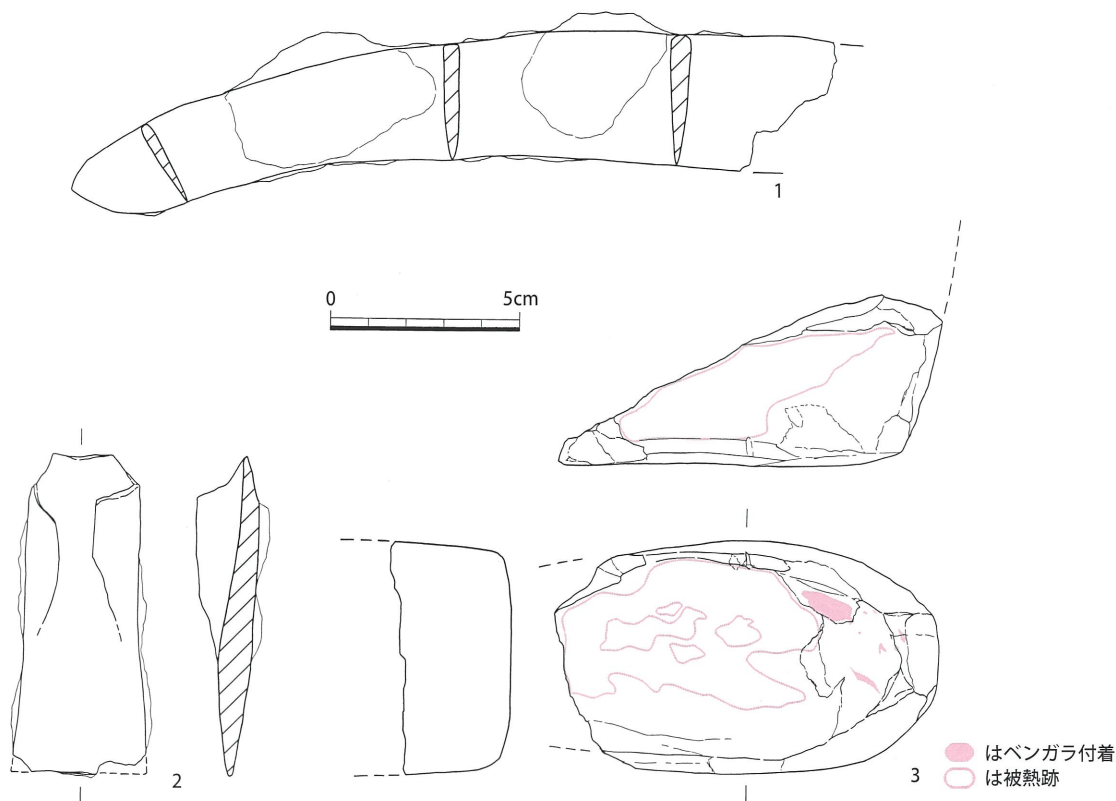
20は、やや胴長で胴の中位に少し間隔の広い3条、頸部にも3条のM字突帯を配するものと考えられる。頸部の一部に赤色顔料が残存付着している。



第9図 祭祀土壇、1号溝出土土器③ (1/4)



第10図 祭祀土壇、1号溝出土土器④ (1/4)



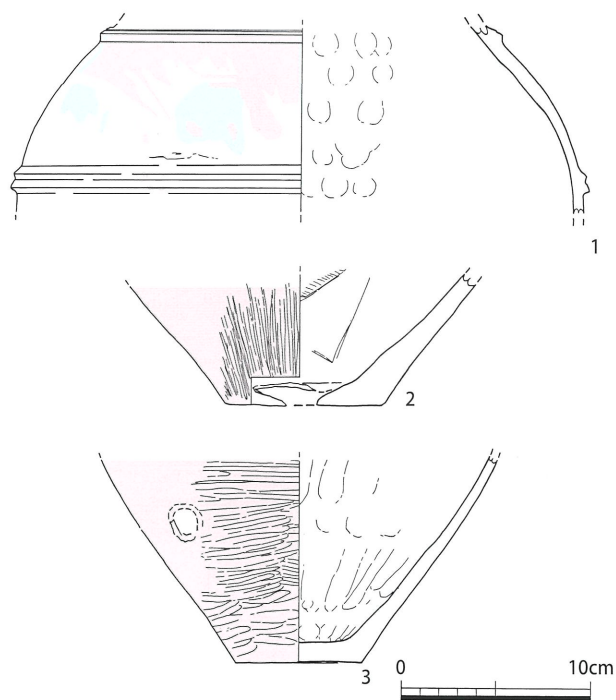
第11図 祭祀土壌、1号溝出土鉄器石器実測図 (1/2)

21は胴部が扁平きみで、中央部から肩にかけて4条のM字突帯をめぐらせる。頸部から胴部にかけて赤色顔料が斑状に付着しており、頸部に丹塗りが施された際に顔料が垂れたものと考えられる。

同類の大型広口壺の出土は糸島地方に集中しており、20は、三雲番上遺跡II-5の土器溜り出土壺（第88図26）、21は、同遺跡土器溜り出土壺（第90図30、32）や飯氏遺跡Ⅲ区44号甕棺上棺などに類例がある。

22、23は中型の広口壺である。22は器壁が厚手で、頸部に暗文状の線刻を施している。23は頸部より上を打ち欠かしている。胴上部に斑状に赤色顔料が付着していることから、頸部から口縁部にかけて丹塗りが施されていたものとみられる。

無頸壺 (24, 31, 32) 24は、無頸壺で、口唇部に紐通し孔があることから有蓋土器であることがわかる。口唇部はわずかに上方に跳ね上がる。31、32は、有蓋脚付の無頸壺と蓋で、1号祭祀土壌から出土した。一対の製品と考えられる。無頸壺は外面に丁寧な研磨を施し、さらに3条のM字突帯の間には細かな縦方向に暗文状の研磨も施



第12図 調査地点出土弥生土器 (1/4)

す。蓋外面は放射状の研磨で仕上げている。同種壺の類例は少ないが、当該資料はそのなかでも端正なプロポーションと研磨、塗彩の美しさのいずれをとっても完成度が高い。

甕 (25～30) 25～27は、丹塗磨研が施された中型甕で胴部が大きく張る。25には3条のM字突帯がめぐり、28～30は、中～小型甕で外面はハケ、ナデで仕上げている。

碗・鉢 (33～36) 33は器壁が薄い碗で、内外面ともに丹塗磨研で仕上げる。34は完形の小型鉢である。外形はシャープさに乏しく器壁も厚手で、ナデで仕上げている。表面に赤色顔料が斑状に付着する。

35、36は、脚付碗である。碗部は半球形を呈し、内外面ともに丁寧な研磨が施される。36は脚上部から碗部にかけてで、残存部位の形状から35と同形品とみられる。

高坏 袋状口縁壺とともに出土数が多い。B群の土器は坏部の径が25～28cm程度と小型で坏部が浅めのものが多く、これらは外表面の剥落劣化が著しいものが多い。

出土鉄器・石器 (第11図)

既報告の鉄鎌、袋状鉄斧各1点の他に、L字形石杵片1点の出土を確認した。現在、鉄鎌と袋状鉄斧の所在が不明であるため、『報告書』から転載した。

鉄鎌 (1) 2号祭祀土壌から出土した。残存長20.1cm、幅3.6cmを測る。基部は破損しており、刃部は長く直線的に伸びて先端部が緩やかに屈曲する。

袋状鉄斧 (2) 3号祭祀土壌から出土した。長さ8.4cm、刃部幅3.6cmを測る。袋部から刃部にかけての身厚が厚いのが特徴である。

L字形石杵 (3) 2号祭祀土壌の埋土から出土した。硬質砂岩製の磨製石器片で、側面にも丁寧に面取り・研磨調整が行われている。平滑な擦過面の窪みに赤色顔料が付着しており、赤色顔料の精製に用いられた石杵片と考えられる。

擦過面が長楕円形を呈していることから、本来の形状は側面観がL字形をなす石杵であったと推定される。残存長10.0cm、幅7.1cm、高さ3.9cm。表面に被熱した痕跡が認められる。

付着していた赤色顔料はベンガラであることが確認されている。

なお、顕微鏡の観察結果では、パイプ状粒子は観察されていない。

2. その他の遺構・遺物

(1) その他の遺構出土土器 (第12図2, 3)

土坑や住居跡からも弥生中～後期の丹塗磨研土器片が出土しており、削平された墳墓、祭祀遺構からの出土品とみられる。遺存状況が良好な2点を報告する。

1は、広口壺の胴上部で、頸部と胴部の境をめぐる突帯から胴部にかけて赤色顔料が塗布されている。おそらく口頸部にかけても丹塗りが施されていたと考えられる。3は、丹塗磨研甕の底部で、底部に穿孔の痕跡が残る。

IV. まとめ

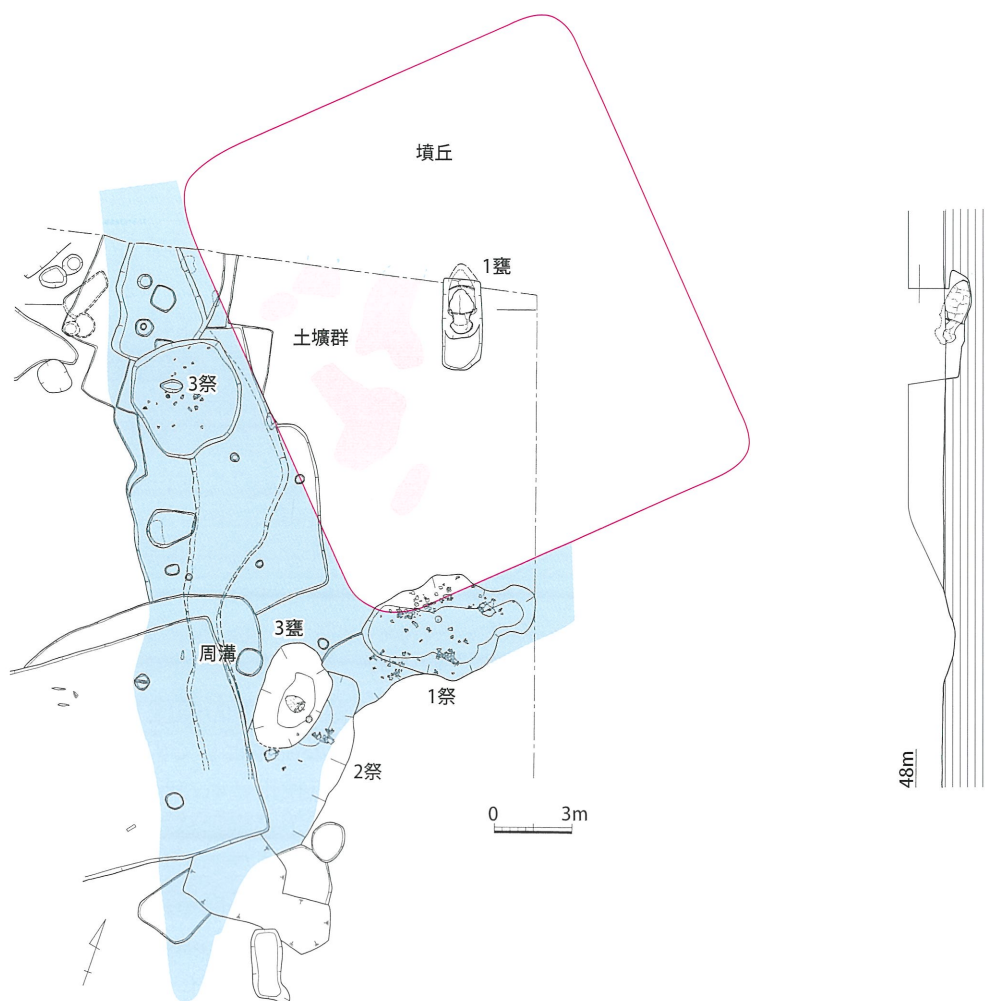
1. 1号甕棺墓と周辺原風景

(1) 区画墓の中心主体としての1号甕棺墓

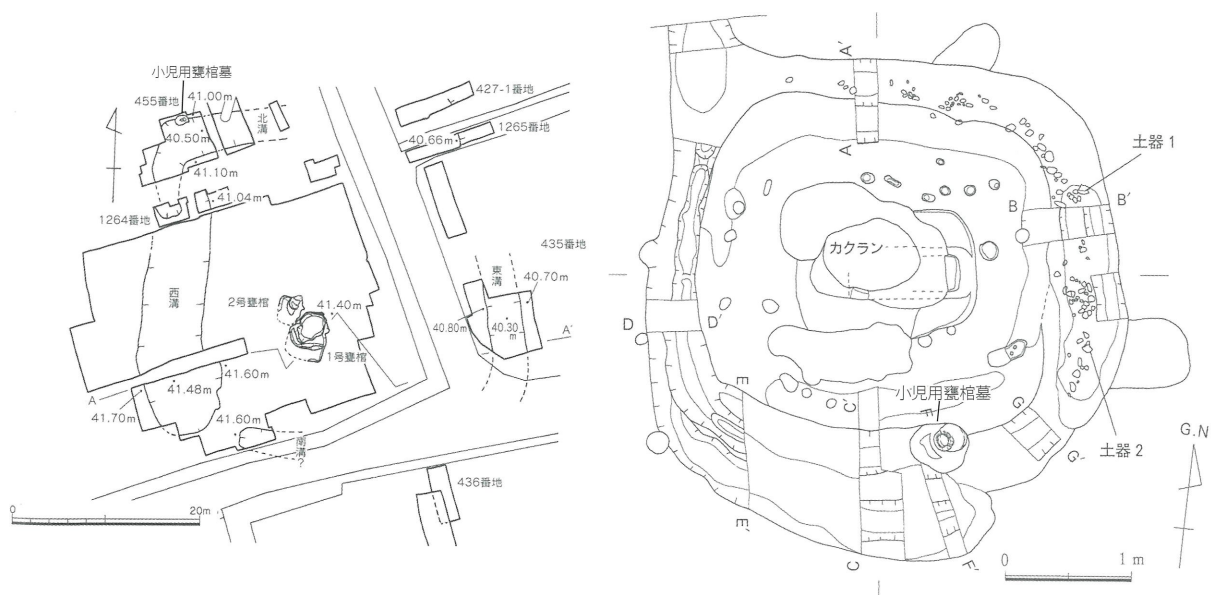
甕棺の西と南で検出された祭祀土壌群に切られていた1号溝は、1号甕棺墓をめぐるように配され、その南北主軸は1号甕棺墓の主軸方位に対応して並行ないしは直交方向を意識しているとみられることから、1号甕棺墓域の区画溝と考えられる。甕棺から副葬品は出土していないが、棺の内外に赤色顔料や黒色顔料が塗布されるなど通常の甕棺では認められない塗彩が行われていることを考慮すれば、区画墓の中心的埋葬棺であったと考えられる。

1号甕棺墓が区画墓の中央に位置することを前提として、区画溝から推定される南および西側の周縁部を反転して区画域を復原すると、一辺13～14mの方形プランを想定することができる(第13図)。このとき、小児棺である3号甕棺は、区画の南西隅角に埋葬されたことになる。小児甕棺が区画墓の縁辺部に寄り添うように後続して営まれる例は、構築時期に近い三雲南小路墳丘墓や平原5号墓でも確認されていて、当地における葬送のあり方の一様相としてとらえることができる(第14図)。

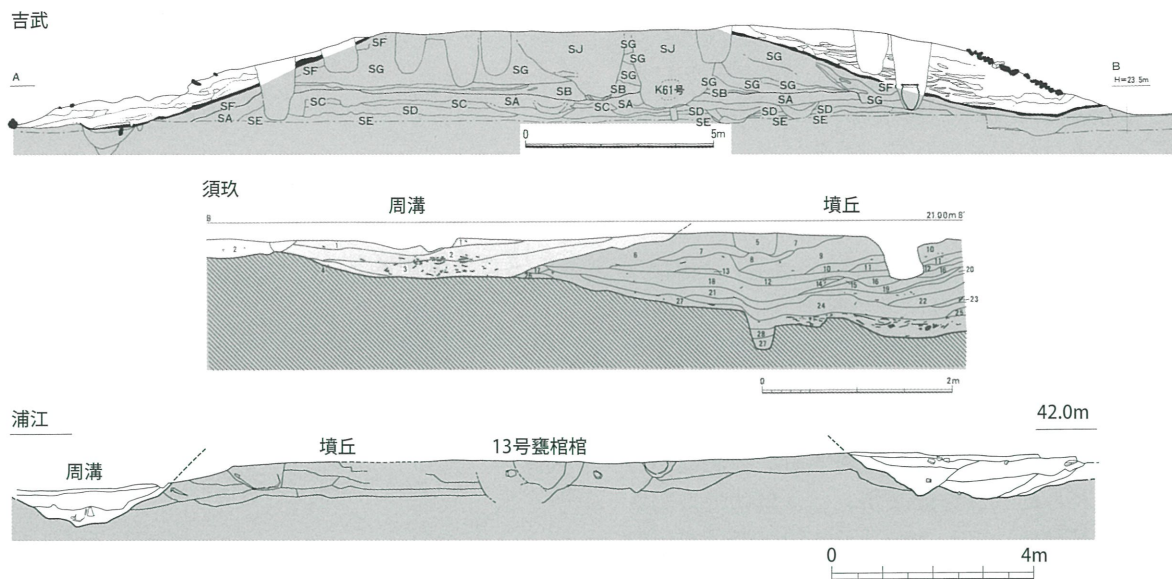
1号甕棺墓は、遺構面直下で上棺の上方が破壊された状態で検出されている。成人甕棺墓の場合、墓壇上面から甕棺の上端まで一定の深さを確保して埋葬されるのが一般的であることを考えれば、甕棺の上面は埋葬時の原状から大きく削平を受け



第13図 1号甕棺墓墳丘推定図 (1/300)



第14図 三雲南小路王墓（左）と平原5号墓（右）における小児甕棺の配置



第15図 吉武樋渡墳丘墓墳丘断面図（上『吉武遺跡群Ⅷ』1998 福岡市教育委員会から転載）
 玖岡本遺跡第1次調査墳丘墓断面図（中『須玖岡本遺跡』1995 春日市教育委員会から転載）
 浦江遺跡・墳丘墓断面図（下『浦江遺跡第5次調査2』2005福岡市教育委員会から作成）

ていたと考えられる。

このことは、周囲で確認された小児甕棺墓の検出レベルと比較することからも追認することができる。通常、成人甕棺墓よりも浅く埋葬されることが多い小児甕棺墓（2, 3, 4号甕棺墓）の、棺底の深さが標高46.7～47.1mあたりで（第4図）、1号甕棺墓（46.6m）とさほど変わらない深さに埋葬されており、1号甕棺墓周辺は他の地点よりも深く削平されたとする推測を裏付ける。

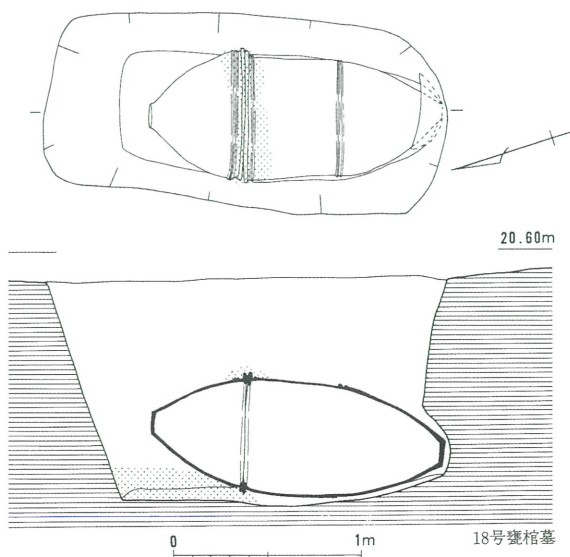
また、調査地点で検出した古墳時代の竪穴住居跡は壁面が残っているなど比較的良好に残存しているにも関わらず、区画内では竪穴住居は検出していない。住居跡は削平されてしまったか、あるいはもともと住居跡がなかったことになる。後者であれば、甕棺の盛土が阻害要因となって竪穴住居の建設が見送られた結果とも考えられる。

さらに、調査地点の「ツカマワリ」という地名は、かつてこの付近に墳丘を伴う古墓が存在したことを想起させ、これらのことを勘案すれば1号甕棺墓は墳丘を伴う区画墓であった可能性が極めて高いといえる。

ちなみに、墳丘の高さを復原するに足る資料は持ち合わせていないが、1号溝の断面を観察すると、溝の底から墳丘にかけての傾斜は30度ほ

どと比較的なだらかで、急勾配の高い墳丘を想定することは難しい（第6図）。

弥生中期後半の近隣地域の墳丘墓を参考に検討してみると（第15図）、吉武樋渡遺跡（福岡市）の墳丘墓では30度（註13）、須玖岡本遺跡（春日市）7次調査の墳丘墓では、残存する墳丘斜面裾の勾



第16図 飯氏馬場18号甕棺墓実測図（1/40）

配は15～20度(註14)、浦江遺跡(福岡市)の区画墓(註15)では33度を計測した。溝底近くであるために勾配が墳丘の上半部よりも緩やかになることを勘案しても、墳丘の傾斜は45度を越えるような急な勾配を呈していたとは考えにくい。

また、墓壙上面から甕棺までの墓壙の深さについて、1号甕棺墓と類似する隅丸長方形の細長い1次墓壙をもつ飯氏遺跡Ⅲ区18号甕棺(福岡市)では、甕棺上部までの深さは地表から概ね50cmであった。また、浦江遺跡では中心的埋葬棺となる13号甕棺の深さが1mほどと推定されている(註15)。また、主体部が墳丘盛土内ではなく、地山下に収まっていることも考慮する必要があるだろう。これらの状況を勘案すれば、現状で推定される墳丘高はせいぜい1～1.5m程度ではないかと考える(第13図)。

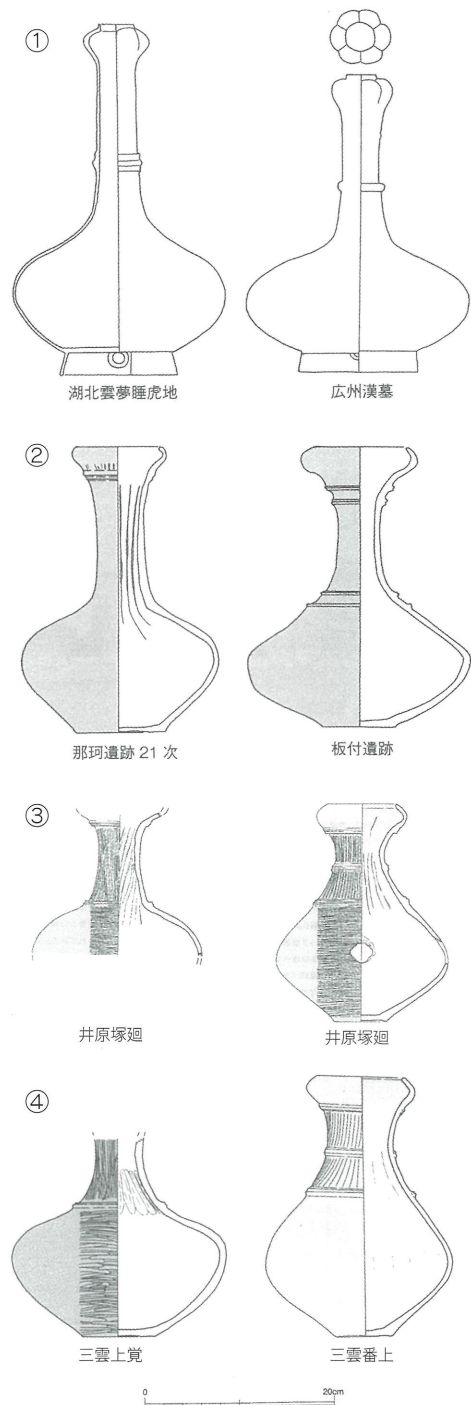
(2) 出土土器

周溝、祭祀土壙から出土した丹塗磨研土器からも新たな知見が得られた。

丹塗磨研土器は、逆L字形口縁甕、広口壺、袋状口縁壺、短頸壺、高坏などで構成される須玖Ⅱ式期の土器群で、このうち、前三器種は糸島地方を中心に分布しそのバリエーションにも富むことから、石橋新次氏によって特に「糸島型祭祀用土器」と命名された(註16)。

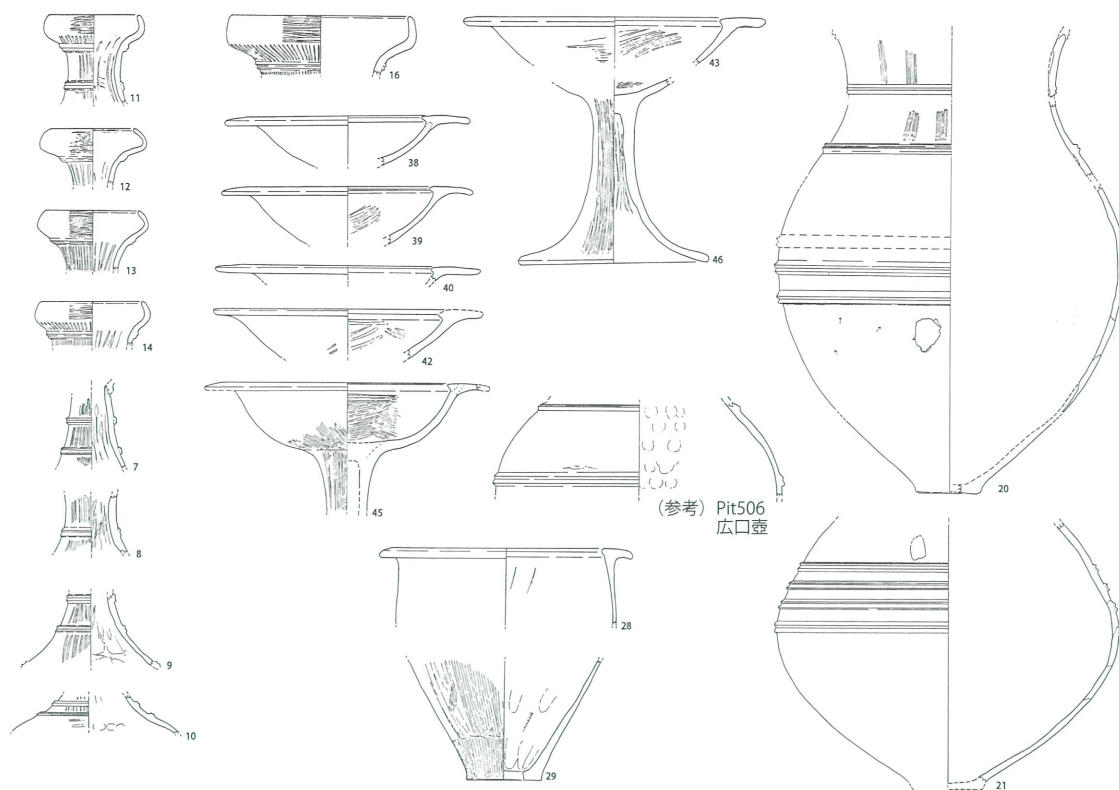
井原塚廻遺跡から出土した一連の祭祀土器群のうち、注目されるのがB群の土器群である(第18図)。この土器群の残存状態は、A群に比べ著しく悪いことを指摘したが、その要因として墳丘や1号溝(区画溝)に遺棄された後、一定期間風雨にさらされるなどで劣化が進み、さらに後の祭祀土壙の掘削によって攪拌され、土器の劣化・破損に拍車がかかったことによると考えられる。

一方、A群土器は、土壙に遺棄された後に速やかに埋納されたことで土器本体は極めて良好な状態を維持されたと考えられる。A群土器が出土した祭祀土壙1, 2, 3では、後世の遺物の混入がみられず、また、土器表面の残存状況は3号甕棺墓の蓋に使用された丹塗磨研の高坏とよく似ており、土器の埋没経過の類似性をうかがわせる。この推定が正しければB群土器はA群土器よりも古相に位置づけることが可能となる。B群土器のうち、袋状口縁壺は、頸部が著しく細く絞り込まれ、また、頸部をめぐるM字突帯は上端と下端に各2

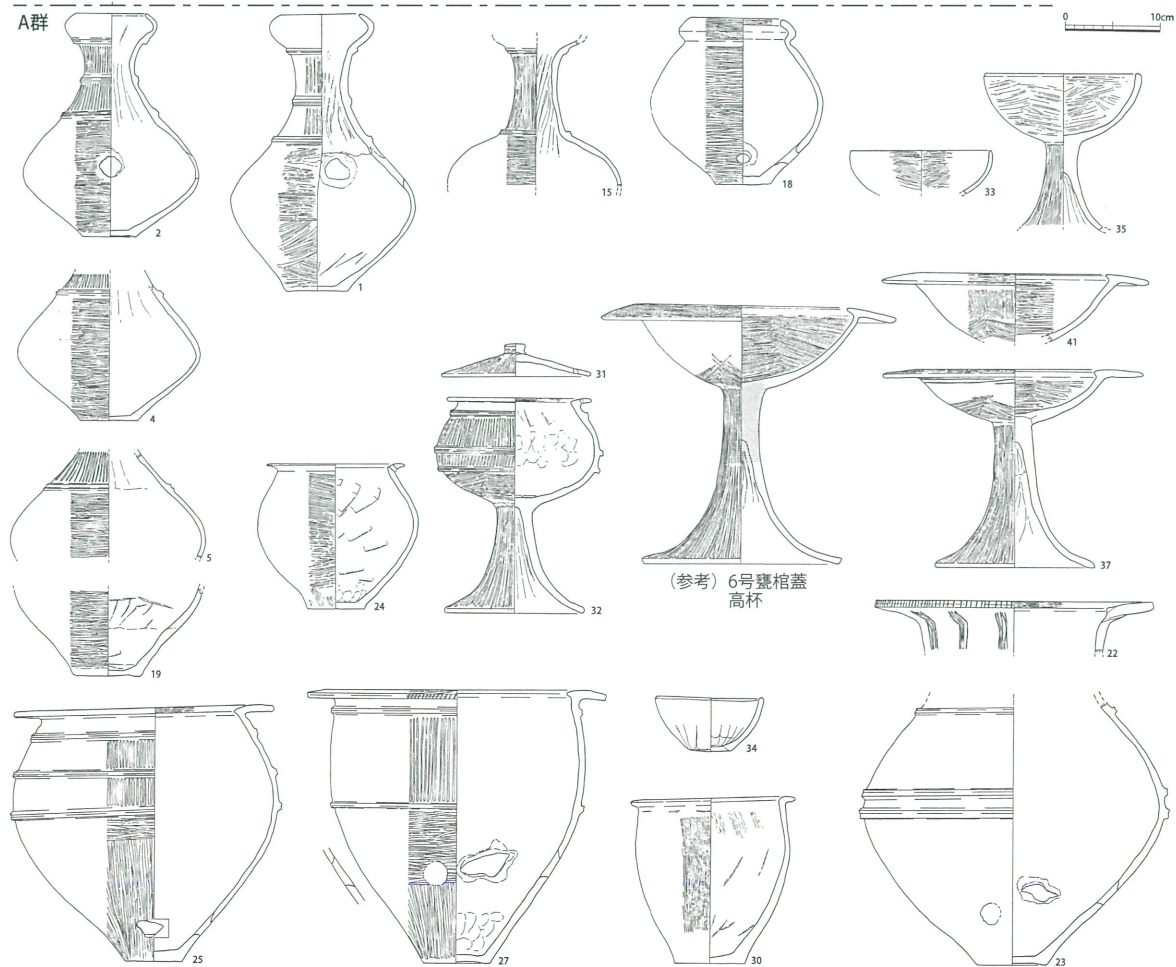


第17図 蒜頭壺～袋状口縁壺の変化イメージ(常松幹夫氏作成図に糸島地方の袋状口縁壺を加えて作成)

B群



A群



第18図 井原塚廻遺跡祭祀土壇出土A群（下段）・B群（上段）土器比較図（1/8）

条、計4条を配したものがみられるのが特徴である。この特徴を有する袋状口縁壺は、これまで板付遺跡井戸出土土器（第17図②）の1例が知られるのみであった。しかし、今回の発見によって同様の特徴を有する袋状口縁壺が糸島～福岡平野に共通して分布することが確認された。また、このタイプの土器は従来から知られる典型的な袋状口縁壺（第17図③～④）よりもわずかながら時期的に先行して出現した可能性が高いことになる。

蒜頭壺に類似する古層の袋状口縁壺が糸島地方でも確認できたことは、この種の土器の出現の契機や時期を考える上でも重要と考える。

常松幹雄氏は、袋状口縁壺の出現経緯を検討し、国内には祖形となるべき器種が見いだせず、突如として出現していることからその起源を大陸に求め、秦～前漢代に中原一帯で盛行した蒜頭壺である可能性を指摘し、弥生中期後半（須玖Ⅱ時期）に楽浪郡を介してもたらされたと考えた（註17）。

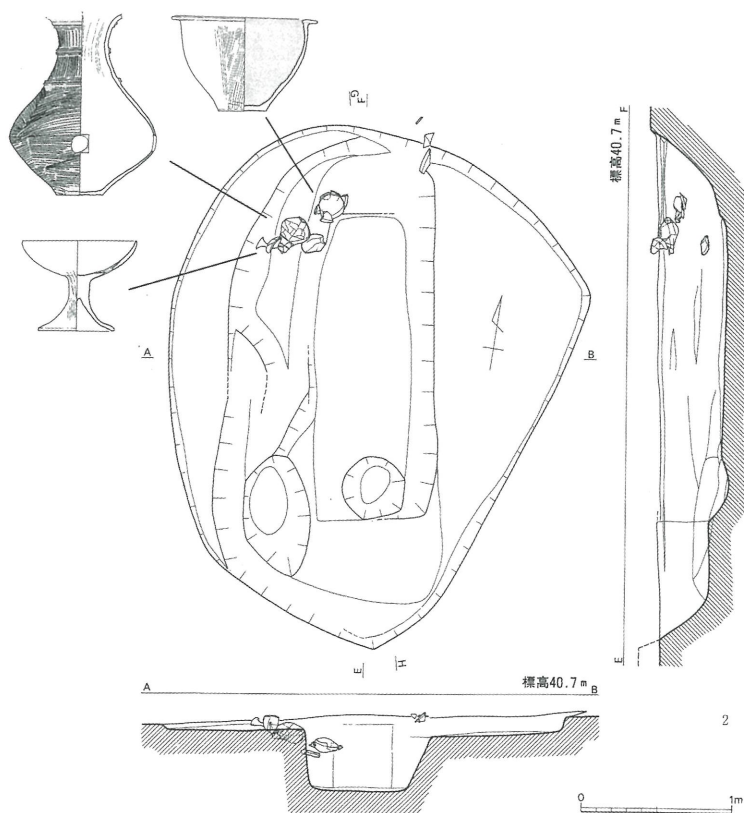
また、中園聡氏は、袋状口縁壺を含めた丹塗精製土器群出現の背景には、朝鮮半島における楽浪郡設置によって活性化された北部九州社会への漢文

化の流入があり、ちょうど須玖Ⅱ式の成立と相まって、漆器やそれに伴う大陸の食器文化の情報が「丹塗り磨研という「色」、「つや」による食器の類別化」の方式として新たに採用された可能性がある」と指摘し、その根底には、宇野隆夫氏が提起した「中国の国家的社会システムを高いレベルで理解し目的意識的にそれに近づこうとする」北部九州倭人の強い意志が働いたとの見解を示した（註18）。

さらに、石橋新次氏は、弥生中期後半以後の北部九州社会において、大陸との外交・経済の中核としての役割を担った伊都国ならではの、内的欲求から創出された極めて強い政治性を帯びた祭祀土器と指摘する。

（3）木棺墓の出現時期と墓地の構成

1号甕棺墓の周辺で1～3号祭祀土壺が掘削された要因について、各祭祀土壺は墳丘裾に寄り添うように配されていることから、土器の埋納要因となった祭祀の対象が区画墓側にあったと考えられる。この場合に留意されるのが、1号甕棺墓の西～西南側で検出された土壺群である。これらが



第19図 三雲塚遺跡木棺墓（1/50）と出土土器（1/10）

土壙墓である可能性を指摘したが、この場合、祭祀土壙群がこれら墓群に対する祭祀儀礼のなかで廃棄された可能性が浮上する。

井原塚廻遺跡の1号木棺墓には丹塗磨研土器が供献されていたことから、中期末の木棺墓であることを明らかにしたが、すでに三雲・井原遺跡では、弥生時代中期後半～末にかけて、成人用の大型甕棺墓に替わって木棺墓が導入され、急速に普及していったことが指摘されている(註19)。

三雲堺Ⅱ-30地点の2号木棺墓(第19図)では、頸部に3条のM字突帯をめぐらせた袋状口縁壺が棺外に供献されていた。この袋状口縁壺は井原塚廻遺跡A群のものと特徴が近似しており、A群土器の出現期がまさに糸島地方において成人用棺としての甕棺墓が木棺墓へと移行する過渡的段階にあたるものと考えられる。そうなると井原塚廻遺跡の1～3号祭祀土壙の祭祀対象は区画内に営まれた土壙(墓)であった可能性が高まるのである。

この場合、区画墓は1号甕棺の埋葬を契機として構築された後にも引き続き複数の埋葬棺の埋葬

空間としても使用されたことになる。よって墳丘墓の位置づけは、当初想定していた特定個人墓(註20)ではなく、特定集団の区画墓(註21)ということになる。

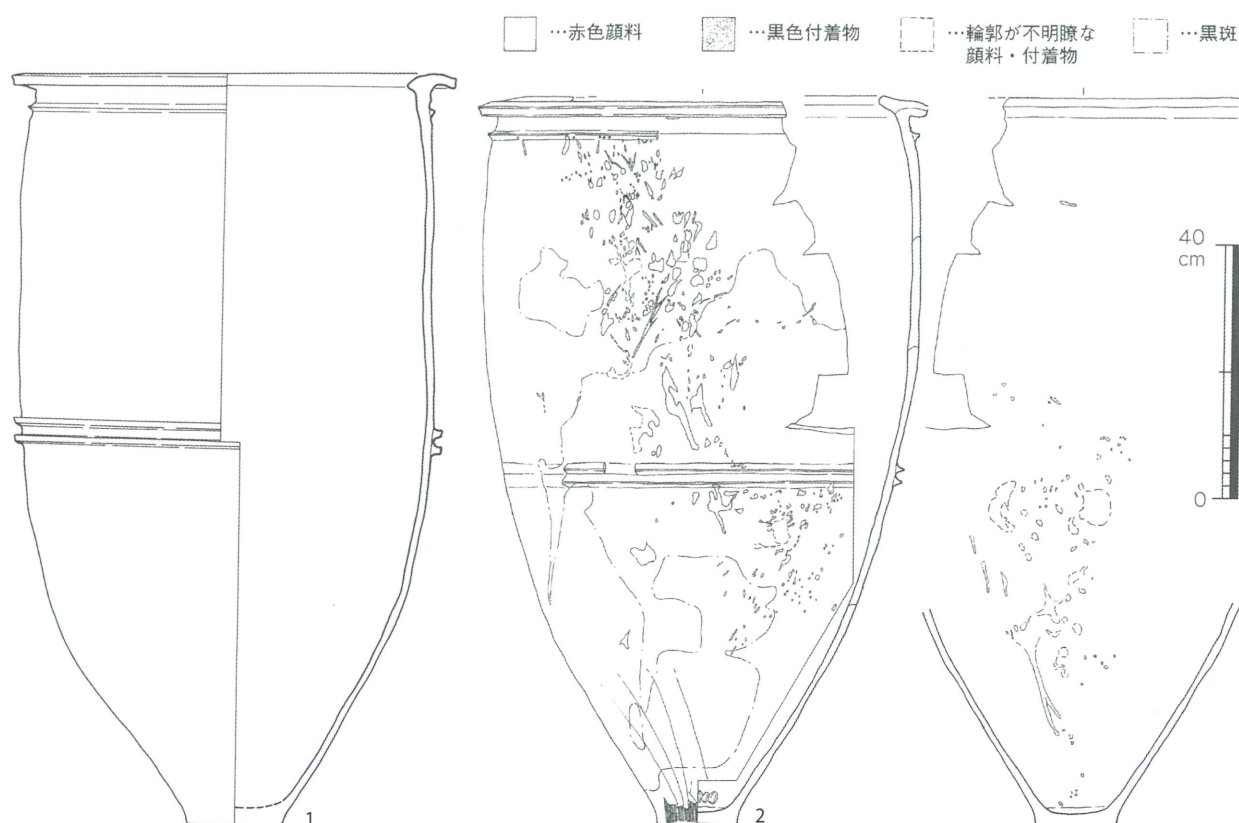
なお、井原塚廻遺跡では、報告された土壙墓以外にもさらに多くの土壙墓が存在した可能性があり(第2図)、これらを含め一定期間にわたり継続的に営まれた、より広範囲に展開した墳墓群を想定する必要があるだろう。

井原塚廻遺跡の立地と成立時期から考えると、この墓地の造営主体は、当該地域の拠点集落である三雲・井原遺跡の成立を契機として、その南東部に新たに形成された衛星集落であろう。1号甕棺墓を中心とする墳丘墓は、その有力集団墓と考えられ、その造墓時期は中期後半となり、三雲南小路王墓の造墓に先行すると考えられる。

2. 赤色顔料を用いた祭祀

(1) 甕棺へのベンガラ塗彩

1号甕棺では、上下棺ともに内外に赤色顔料の



第20図 赤色顔料の塗付が確認された井原塚遺跡1号甕棺(左 1/12)と吉武遺跡9次調査15号甕棺(中・右 1/12)

塗彩が確認された。用いられた顔料はベンガラで、焼成前に塗彩色されたものと考えられる。甕棺の製作段階で塗彩を施して他の甕棺との差別化を意図した事例のひとつとして注目したい。

なお、類似する赤色顔料塗布甕棺の例は、筑後平野において、1980年代に上川原遺跡（朝倉市）、栗田遺跡（筑前町）で相次いで報告されている（註23）。これらを詳細に検討した馬場弘稔氏は、土器製作過程に着目し、他の丹塗磨研土器などとともに、非日常的な「祭祀的環境」のもとで製作されたことによる偶発的要因によって引き起こされた事例とした。

また、安国寺遺跡（久留米市）の発掘調査でも同様の甕棺の出土が確認され、萩原裕房氏は指頭状の赤色顔料の付着痕などが確認されたことなどによって、顔料が付着したまま甕棺が製作されたためとするなど、その要因について馬田氏の見解を追認する見解を示した（註24）。

井原塚廻遺跡出土甕棺では、胴部の突帯にのみ赤色顔料が塗彩されており、また甕棺内面にも塗付が行われている。この甕棺は器高が1mを越えるものであるから、周囲において、赤色顔料の塗彩行為が行われていたにせよ、意図的でなければ棺内にまで飛沫が付着することを想定することは難しい。さらに黒色顔料の塗布も認められること、同様に上棺の広口壺にも内外面に顔料の塗付が行われたことは、甕棺の製作過程において明確な意図をもって塗彩・塗付が行われたと考えるべきであろう。同期の甕棺で他に類例が見つかっていないことは、墳丘墓の中心的埋葬主体であることと併せて、棺体への塗彩・塗布による被葬者の差別化がその背景にあるものと推察される。

甕棺の棺内における赤色顔料の塗彩例は、新たに井原塚遺跡1号甕棺墓（中期後半）でも確認した。（第20図1，巻頭図版3-e）。底部内面に不正円状に径10cmほどの範囲にベンガラが塗彩されていた。顔料の発色は黒みを帯びた赤色で、丹塗磨研土器にみられる鮮明な朱赤色とは異なる点は、階層差によるベンガラの材質の優劣や、塗彩の目的・意図とも関係しているかもしれない。

また、高祖山系を越えて東隣の早良平野側に位置する吉武遺跡9次調査15号甕棺墓においても中期後半の甕棺に赤色顔料が塗彩されている例が報告されている（註22）。甕棺の内外に赤色顔

料が塗布された痕跡がみられ、なかには、「指先に顔料が付着した状態で甕棺にさわった」と解されるものもあり、井原塚廻遺跡の赤色顔料の付着状況と酷似するものが認められるのは、当該地域間における儀礼の共有という視点において注目したい（第20図2）。また、これらがいずれも中期後半の甕棺であることから、この種の塗布・塗彩行為が出現がほぼ同時期であることも注意されるところである。

（2）石杵の出土

1号甕棺墓周溝から出土した遺物として新たに石杵が確認された。擦過面にはベンガラが付着しており、葬送儀礼における赤色顔料の使用に関連するものとして注目される。

三雲南小路遺墳丘墓では、周溝から水銀朱が内面に付着した弥生後期前半の鉢や甕が滑石製のL字形石杵とともに出土しており（註25）、文政5（1822）年に中期末の1号甕棺が発見された際には、墓壙中からは水銀朱を詰めた小壺が出土したことも記録されている（註26）。

浦江遺跡（福岡市）で発見された墳丘墓の中心的な埋葬棺とされる13号甕棺の棺内からは水銀朱塊が検出されるなど（註27）、伊都国とその周縁においては、弥生時代中期後半から後期にかけて、上位階層の葬送儀礼において水銀朱の多様な使用が認められる。

この頃、北部九州で使用された水銀朱の産出地の大半は中国産であることが、イオウ同位体分析によって明らかとされている（註28）。

常松幹雄氏は、前述の袋状口縁壺やヒョウタン形土器の出現の背景として、中国の神仙思想の北部九州社会への伝播を想定しているが、大陸産の水銀朱を用いた各種儀礼もまた、この影響の下に新たに開始された可能性があるだろう。階層隔差の顕在化によって下位の有力層墓では、希少な水銀朱の代替品としてベンガラが用いられたことも想定される。

3. 農工具の供献

祭祀土壙群から鉄鎌と袋状鉄斧が出土していることにも留意しておきたい。

送葬に伴い農工具が副葬・供献される事例は弥生中期後半以降顕著となるが、糸島地方では時期

は少しさかのぼるか³、三坂七尾遺跡（糸島市）の6号祭祀土壇で太形蛤刃石斧の出土例がその初見である（註29）。この土壇からは、広口壺、打ち欠かれた甕棺の口縁など、葬送儀礼の関連遺物が出土するとともに、太形蛤刃石斧片が、数点出土している。これらも送葬儀礼に伴い土壇中に意図的に遺棄された可能性が考えられる。

三雲南小路王墓では、周溝に埋葬された小児甕棺の棺外に石包丁の未成品が供献されていた。これら農工の実具が墳墓の周縁で廃棄・埋納される意味については、現在のところ十分な検討資料を持ち合わせていないので、今後の更なる検討課題としたい。

註

1. 林覚『井原塚廻遺跡』1993 前原町教育委員会
2. 岡部裕俊「王墓の出現と甕棺」『考古学ジャーナル No.451』1999 ニューサイエンス社
3. 川村博『高祖遺跡群』1988 前原町教育委員会
上田健太郎『高祖遺跡群』Ⅲ 2001 前原市教育委員会
4. 林覚『井原遺跡群』1986 前原町教育委員会
5. 前原町教育委員会『前原町文化財分布地図』1972
6. 調査を担当した角浩行氏から教示
7. 岡部裕俊『井原地区周辺の古墳群』1994 前原市教育委員会
8. 未報告 伊都国歴史博物館所蔵
9. 江崎靖隆「墳墓の変遷」『三雲・井原遺跡Ⅷ』2013 糸島市教育委員会
- 10.11 志賀智史志氏のご教示による。
12. 本稿では、江崎靖隆「甕棺の編年」『三雲・井原遺跡Ⅷ』2013 糸島市教育委員会 の編年案に基づき、時期を記述する。
13. 横山邦継『古武遺跡群Ⅷ』1998福岡市教育委員会
14. 平田定幸『須玖岡本遺跡』1995春日市教育委員会
15. 常松幹夫『浦江遺跡 第5次調査2』2005 福岡市教育委員会
16. 石橋新次「糸島型祭祀土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』1992 有明文化を考える会
17. 常松幹雄「ヒョウタン形土器の出現とその背景」『倭人の海道』2007 伊都国歴史博物館
18. 中園聡「丹塗精製器群盛行の背景とその性格―東アジアの中の須玖Ⅱ式土器」『人類学研究10』1998
宇野隆夫「木製食器と土製食器―弥生変革と中世変

革―」『古代の木製食器―弥生期から平安期にかけての木製食器』（発表要旨）1996 第39回埋蔵文化財研究会実行委員会

19. 江崎靖隆「墳墓の変遷」『三雲・井原遺跡』2013 糸島市教育委員会
20. 溝口孝司「甕棺墓地の移り変わり」『弥生のタイムカプセル』1998福岡市博物館
21. 註2に同じ
22. 羽方誠「甕棺に付着した赤色顔料―福岡市吉武遺跡出土例―」『福岡考古19号』2001 福岡考古懇話会
23. 馬田弘稔『上川原遺跡』1982 甘木市教育委員会
馬田弘稔編『栗田遺跡（B地区）』1986 三輪町教育委員会
馬田弘稔「弥生時代の土器祭祀」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集上巻』1982 記念論文集刊行会
24. 立石雅文 萩原裕房「安国寺遺跡の調査」『東部地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書2』1983 久留米市教育委員会
25. 岡部裕俊・牟田華代子『三雲・井原遺跡Ⅱ』2002 前原市教育委員会
26. 青柳種信『柳園古器略考』1822
27. 註15に同じ
28. 今津節生他「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』2006 前原市教育委員会
29. 岡部裕俊・牟田華代子『三坂七尾遺跡』2000 前原市教育委員会

挿図 番号	番号	器 種	遺構名	法 量				基本調整		外面色調	胎土	焼成	備 考
				器高	口縁径	胴部最大径	底(脚)径	外面	内面				
3	2	甕棺（下棺）	1号甕棺	112.6	79.6	70.0	15.2	ナデ	ナデ	桃褐色	良好	良好	内外面に赤色顔料 外面に黒色顔料
3	1	甕棺（上棺）	1号甕棺	67.6	68.2	60.8	10.2	ナデ	ナデ	暗赤褐色	良好	良好	頸部は内外面ともに 丹塗
4	1	甕	2号甕棺	42.7	36.4	36.6	9.6	ハケ	ナデ	明茶褐色	良好	良好	
4	2	甕（下棺）	3号甕棺	49.1	35.2	39.1	10.6	ハケ	ナデ	茶褐色	良好	良好	
4	3	高坏（上棺）	3号甕棺	27.3	31.4		21.2	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
4	4	広口壺	4号甕棺	57.7	49.8	46.6	11.6	ハケ	ハケ	茶褐色	良好	良好	
7	1	袋状口縁壺	3号祭祀	29.0	8.3	19.3	9.0	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	内面は桃褐色
7	2	袋状口縁壺	1号祭祀	23.4	90.7	18.3	5.6	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	胴部穿孔
7	3	袋状口縁壺	3号祭祀	—	9.7	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
7	4	袋状口縁壺	1号祭祀	—	—	19.1	6.1	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	5	袋状口縁壺	1号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	6	袋状口縁壺	1号祭祀	—	—	20.3	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	内面は暗褐色
7	7	袋状口縁壺	3号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	8	袋状口縁壺	3号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	9	袋状口縁壺	3号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	10	袋状口縁壺	2号住居	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	内面は桃褐色
7	11	袋状口縁壺	3号祭祀	—	9.2	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	暗文状の彩色
7	12	袋状口縁壺	3号祭祀	—	8.6	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	13	袋状口縁壺	3号祭祀	—	9.7	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	磨滅著しい
7	14	袋状口縁壺	3号祭祀	—	10.6	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
7	15	袋状口縁壺	1号祭祀	—		18.0	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	16	袋状口縁壺	3号祭祀	—	18.5	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
7	17	袋状口縁壺	3号祭祀	—		—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
7	18	袋状口縁壺	2号祭祀	17.4	9.6	18.2	5.8	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
7	19	袋状口縁壺	1号祭祀	—			6.7	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	内面は黒灰色
8	20	大型広口壺	1号祭祀	—		56.0	9.0	ナデ	ナデ	淡黄桃色	良好	良好	
8	21	大型広口壺	1号祭祀	—		55.2	—	ナデ	ナデ	淡黄桃色	良好	良好	胴上部に穿孔
9	22	広口壺	1号祭祀	—	29.2	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	良好	良好	
9	23	広口壺	1号祭祀	—	—	32.5	7.3	ナデ	ナデ	明褐色	精良	良好	胴部2力所穿孔
9	25	甕	2号祭祀	26.9	27.4	28.7	6.0	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
9	26	甕	1号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
9	27	甕	2号祭祀	—	—	—	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	胴部2力所穿孔
9	28	甕	1号祭祀	—	23.0	23.1	—	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
9	29	甕	1号祭祀	—	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
9	30	甕	1号祭祀	17.3	17.3	16.3	7.4	ハケ	ハケ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
10	31	蓋	1号祭祀	3.4	15.7	17.7	14.6	研磨		赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	32	脚付無頸壺	1号祭祀	22.7		—	14.6	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)			
10	24	無頸壺	1号祭祀	15.4	14.4	16.3	5.9	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	精良	良好	
10	33	埴	3号祭祀	—	14.7	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	34	鉢	3号祭祀	5.8	11.5	—	5.0	ナデ	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	35	脚付埴	1号祭祀	—	16.5	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	36	脚付埴	1号祭祀	—		—	—			赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	37	高坏	1号祭祀	21.0	27.2	—	—		研磨	赤褐色(丹塗)	精良	良好	脚部高 15cm
10	38	高坏		—	25.6	—	—			赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	39	高坏		—	26.3	—	—		研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	40	高坏		—	—	—	—	研磨		赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	41	高坏	3号祭祀	—	27.9	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	42	高坏		—	—	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	43	高坏	3号祭祀	—	31.6	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	44	高坏	3号祭祀	—	—	—	—		研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
10	45	高坏	3号祭祀	—	28.8	—	—	研磨	研磨	赤褐色(丹塗)	良好	良好	坏部深 6.4cm
10	46	高坏	3号祭祀	—	—	—	20.0	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	脚部高 17.5cm
10	47	高坏	3号祭祀	—	—	—	17.4	研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
12	1	広口壺	Pit506					ナデ	ナデ	暗桃黄色	良好	良好	
12	2	甕	10号住居					研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	
12	3	甕	1号土坑					研磨	ナデ	赤褐色(丹塗)	良好	良好	

※遺構名では、祭祀土壌を祭祀と標記。器面調整では、調整面の主たる調整方法のみ記載した。

井原塚廻り遺跡出土土器観察表